

ディズニー映画とポリティカルコレクトネス

3年1組21番 宮川眞弥

Keyword: 「ポリティカル・コレクトネス」「ディズニー」「プリンセス」

1. はじめに

本探究は、ディズニー映画とポリティカル・コレクトネス(ポリコレ)の関係を探究することを目的とする。ポリティカル・コレクトネスとは、社会の特定のグループのメンバーに不快感や不利益を与えないように意図された政策などを表す言葉の総称を指す。ディズニーは、2023年に創立100周年を迎えるにあたり、その長い歴史の中で数々のヒット作を生み出してきた。これらの成功は、時代の風潮やトレンドに応じたポリコレの実践に支えられている。ポリコレが適切に取り入れられることで、ディズニー映画は社会の多様性を反映し、広範な観客層に受け入れられる作品となる。このため、ポリコレはディズニーの成功において欠かせない要素なのだ。本論文では、ディズニー映画がどのようにポリコレを取り入れ、これが作品に与える影響を考察する。また、ポリコレの進展がディズニー映画の表現にどのように反映されているかを分析し、今後のディズニーの方向性についても考察を深める。

2. 序論

ディズニー映画と大衆の関係性は、ディズニー創業当初から非常に密接なものだった。ディズニーは常に社会の動きに敏感であり、政治や経済の影響を受けながらも、大衆に寄り添った作品作りでその地位を確立してきた。特に、ディズニーが直面した初期の大きな出来事の一つとして、第二次世界大戦が挙げられる。戦争が長引き、世界経済が不安定になる中、映画産業もその影響を大きく受けた。1929年には世界恐慌が発生し、それが1939年まで続くことになる。この間、日本では1937年に日中戦争が勃発し、同じ年にディズニーの最初の長編アニメーションである『白雪姫』が公開された。その後、1939年には第二次世界大戦が勃発し、再び世界が不安定な状況に陥った。ディズニーはこうした困難な時代の中で事業を確立し、成長させていかなければならなかった。そこでディズニーは、作品の中で当時の不安や社会的状況を反映する描写を取り入れた。例えば、『白雪姫』では「毒りんご」、『バンビ』では「森の火事」、『ファンタジア』ではクライマックスで「暗闇」が覆うシーンなど、恐怖や不安を感じさせるシーンを盛り込んでいる。これにより、ディズニーは大衆が抱えていた不安や葛藤を映画の中に投影し、観客と感情的に共鳴することができた。また、第二次世界大戦中には軍からの要請で、国民の士気を高めるためのアニメーションを制作するなど、政治との関係性も重要な要素として存在していた。こういった要素がディズニーの成功への大きな架け橋となり、社会的現実とファンタジーを融合させた映画作りが「ディズニー映画らしさ」を確立する一助となったと言える。

3. 本論

さらに、ここからディズニー映画とポリティカル・コレクトネスの関係性にも注目することができる。特にディズニープリンセスシリーズは、ディズニー映画の中でも特に大きな成功を収めており、その中で女性の描かれ方が時代と共にどのように変化していったかが見どころだ。プリンセスはいつの時代でも「勇気」と「優しさ」を持ちつづければ、運命さえも、変えられるということを教えてくれる。しかし、近年では、プリンセス映画の流行は女性の尊厳や独立性を失わせるという世論も高まっている。初期のプリンセス映画では、王子との結婚が幸せのゴールとして描かれ、伝統的な女性像が強調されていた。しかし、時代が進むにつれ、女性の尊厳や独立性が重要視されるようになり、その変化が映画にも反映され

るようになった。例えば、1998年に公開された『ムーラン』では、主人公のムーランが男装して戦場に赴くという従来のプリンセスとは異なるストーリーが描かれており、さらに、ムーランはディズニー映画で初めて武器を持つ女性キャラクターとなった。この映画の最大の特徴は男性とのラブロマンスもほとんど描かれていないことだ。ではこの映画のテーマは何か。この映画のテーマは「自分らしさを見つけること」。ムーランは典型的な女性像に疑問を抱き、自分の生き方を模索する姿が描かれている。しかし、ムーランは依然として男性中心の社会における軍隊に参加しており、その動機も父親という男性を助けるためであるため、完全に男性中心主義から脱却したわけではない。

そこで、より自立的な女性像を描いた作品として、2010年に公開された『塔の上のラプンツェル』が挙げられる。ラプンツェルは自らの夢の実現のために自由を求める意志を持ち、多様性を重視するため、ディズニーは英語タイトルを『Rapunzel』という髪「長いお姫様」という意味の言葉から『Tangled』という「絡まった」という意味の言葉に変更した。この作品では、ラプンツェルの自由で活発な性格と、典型的なプリンセスの外見との対比が強調されており、プリンセスというよりはヒロインとしての新たな女性像が描かれている。しかし、彼女の性格とは対照的に、ラプンツェルの外見は現代の多様性の潮流に逆行しており、大きな目、美しい長い髪、ドレスなど、典型的なプリンセス像に逆戻りしたかのような特徴が見られる。この性格と容姿の対比により、ラプンツェルは過剰な「プリンセス」としての固定概念や憧れを視聴者に抱かせることなく、彼女が「プリンセス」という枠組みではなく、より自主性を持った「ヒロイン」として人々の目に映るようになったといえる。これまでも、生まれながらのプリンセスではない女性たちの物語は、『ムーラン』や『プリンセスと魔法のキス』などの作品で描かれてきた。それらの作品では、プリンセスらしさを感じさせない、より現実的で現代的な女性像が確立されている。だからこそ、『塔の上のラプンツェル』では、あえて典型的なプリンセスの容姿を取り入れることで、プリンセスであっても等身大の女性であり得るということを証明しようとしている。次に、ラプンツェルの特徴的な髪に注目すると、ヨーロッパの伝統文化では髪の色がその人の性格や地位を表す象徴とされてきた。特に金髪は、太陽の光や黄金を連想させることから最も美しく、貴族的なものとされ、祝福された存在の証とされている。また、長い髪は古くから男性の理想とされ、多くのプリンセスがその象徴として長く美しい髪を持っている。こうした要素を持つラプンツェルの姿は、従来の男性に好まれるプリンセス像を強く意識して描かれていると言えるだろう。劇中、ラプンツェルが長い髪を失うシーンでは、長い金髪という「プリンセスらしさ」や「男性の理想」の象徴を完全に失うことで、ラプンツェルが本当の家族や居場所を取り戻し、真の幸福を手に入れる様子が描かれている。これを今なお人気プリンセスの1人であるシンデレラと比較すると、シンデレラは魔法の力を借りて美しいプリンセスに変身し、その姿で幸せを掴む。一方、ラプンツェルは金髪という魔法と美の象徴を手放すことで幸福を得る。この点で、従来の作品とは異なるアプローチが見られる。

ここで、これまで述べたポリティカル・コレクトネスの変化を踏まえ、私の中にひとつの疑問が生じた。それは、「本当にディズニーはポリコレを活用することで業績を向上させているのか」という点である。1980年代から2023年までのディズニーのアメリカおよびカナダでの興行収入を見てみると、2018年までは順調に業績が伸びていたものの、2020年に著しく低下していることが分かる。これは新型コロナウイルスの影響が大きいと考えられるが、その後も業績は大きく回復せず、低迷が続いている。例えば、2023年に公開された『ストレンジ・ワールド』は制作費282億円に対して興行収入115億円という結果に終わり、ディズニー史上最大の約167億円の赤字を記録した作品となった。そこで、ディズニーが時代に適応する力が高いにもかかわらず、近年の業績低下や作品離れの原因について考えた。その大きな一因は、「ポリコレを意識し過ぎたことによる映画の世界観の崩壊」である。ディズニーは初期の頃からファンタジーに少しのリアリティを加えることで、映画に入り込みやすい状況を作り出してきた。例えば、映画『美女と野獣』では、主人公ベルが住む村の看板にフランス語が使われ、彼女が読む本もフランスを連想させる内容となっている。

また、村人たちがフランス語で挨拶を交わすシーンも見られる。さらに『ライオンキング』では、冒頭に南アフリカの公用語の一つであるズールー語が使われ、キャラクターたちがアフリカ東部で使われるスワヒリ語のフレーズが含まれた歌を歌う。作中に描かれる滝も、アフリカ南部のザンビアとジンバブエの国境にあるヴィクトリアの滝をモチーフにしている。このように、『美女と野獣』や『ライオンキング』には地図は登場せず、ストーリーだけでは舞台を特定するのは難しいが、使用される言語や情景によって、視聴者はフランスやアフリカを舞台とし認識し、リアリティを生む。こうした調和が、ディズニー映画をより魅力的にしていると言える。それに対して、映画『ストレンジワールド』の舞台であるアヴァロニアは、非常に異世界的で非現実的な色使いやデザインが特徴的である。主人公は黒人と白人のハーフであり、同性愛者という設定で、さらに平等を意識しすぎた結果、映画の主要キャラクターには圧倒的なメインキャラクターが不在である。また、飼い犬が片足を失っているなど、現代社会で議論されるトピックが盛り込まれているが、これがあまりにも現実的すぎるキャラクター設定を生んでいる。このように、映画の設定において、平等や多様性を意識しすぎるあまり、作品のキャラクターがリアルすぎる反面、舞台となる世界観が非現実的すぎるというバランスの崩れが、観客に受け入れられなかった一因と考えられる。これにより、現実とファンタジーのバランスが崩れ、ディズニー映画本来の魅力が失われたという指摘がされている。したがって、時代に合わせる必要が必ずしも需要を満たすとは限らないという結論に至った。

4. 結論

このような状況を踏まえ、ディズニーの今後の展開として、私は「ストーリーテリング映画（仮）」という新しい形式の映画を提案したい。この映画は、観客が映画の進行や結末に影響を与える体験型のものであり、映画館で観客が装着するリストバンドを通じて、体温や心拍数、表情などをAIが読み取り、このデータに基づいて、映画の次の展開が決まる仕組みになっている。そのため、いつ、どこで、誰とその映画を観たかによって結末が異なり、各観客が見た展開に応じて感想が変わることが期待される。また、観客自身が展開を決めるのではなく、大きな裏切りを映画内で起こすことも可能である。これにより、映画の結末は観客ごとに異なり、何度も映画館に足を運ぶことで新たな体験ができる。SNS時代において、このような映画は大きな話題を呼び、再びディズニー映画に対する注目を集めることが期待できる。

5. 参考文献・出典

Atsu Blog 「ディズニー映画『ストレンジ・ワールド』はなぜ『ポリコレやりすぎ』と言われるのか？」 Atsu Blog.

<https://atsu-blog.com/strange-world-pc/>, (2024-6-12)

Statista. “North American Box Office Gross Revenue from 1980 to 2023.” Statista.

<https://www.statista.com/statistics/187069/north-american-box-office-gross-revenue-since-1980/>, (2024-5-23)

THE RIVER (2023年1月13日) 「『バズ・ライトイヤー』『ストレンジ・ワールド』計3億ドルの赤字になっていた」 THE RIVER.

https://theriver.jp/disney-bombed-2022/#google_vignette, (2024-6-10)